

## 写真を見て亡き父好勝を思う。

息子の私が写真でしか知らない頼所Ⅰ型を見て、父の心の内に思いを巡らせてみた。

空高くぐるりと飛ぶ鳶のように大空を自由に飛べたらどんなに素晴らしいだろう、という思いが若き父を駆り立てた。頼所Ⅰ型は空を飛ぶ乗り物じゃない。身に着ける翼だ。自分が鳶になったつもりで形をデザインしたのだろう。大空を飛ぶ鳥のように均整のとれた自然な曲線美を感じる。父は無駄な飾りやデザインに批判的で、常に実用的で機能優先のシンプルなデザインにうるさかった。このⅠ型から後に、あの究極のデザインとも言えるⅡ型に辿りつく。

人真似は恥だとばかりに、父は独創性を自負していた。信州の田舎、養蚕とりんご作りの農家に生まれた父。この写真は二階の蚕部屋で撮ったものだと言った。中学校時代、勉強机は木製のりんご箱だった。得られるグライダーの情報は僅かだっただろうが、持ち前の独創性で試行錯誤しながらⅠ型を考え上げたに違いない。

暇なくいつもアイデアを思い付いていた父。その度に、「い〜こと考えた」と言っていた。自分自身の経験から湧き出る知恵を頼りに、いつも考えていた。いい考えが浮かぶと、とにかく試してみて上手く行かないと、「おかし〜なあ、おかし〜なあ」と口癖のように言いながら、思いどおりに行くまで考えに考え、実験を繰り返していた。

Ⅰ型を創り出したのは、もちろん父の学識からではない。独創性だけでも成し遂げられなかっただろう。それは、自分の思いを実現しようとする、挫けることを知らない並外れた根性があったからだ。Ⅱ型も然りだ。その陰で、家族や友人の助けや犠牲が不可欠だったことも忘れてはならない。（2012年12月 頼所和久）

写真出展 東京 小美濃芳喜

滑空史保存協会本部河辺新一(写真修正 鳥取松本陽一)

追いかけた、私はできる限り頼所好勝を追いかけてみた。思い立った時すでに頼所好勝先生は故人であったが国子奥様やご長男和久氏の出会いが今までは見えてこなかった先生の「人間頼所」を表に出していただけた。

また和久氏は滑空史本部を広島から2度も訪問され心行くまで談義を交わしていただけた。今回から1年間ホームページを飾る写真をごらんいただいたとき「初めて目にする写真であること」「こんなに肥えてる父をはじめてみた」と。どうやらこの写真は養蚕部屋2階で頼所1型の骨組み完成時、長兄が撮ってくれた写真と思われる。それは記録によれば1934年昭和9年12月となるのである。この直後翼貼りりでドープ作業中のミスが失火を招き、2階から飛び降りて外科病院まで走りこんだ有名な逸話が残されている。そのやけどのあとは生涯頼所の心に「おのれの力」を思い出させる原

動力となった由。かなりの火傷が体に残ったのだが家族も友人もその事に触れることはなかったそうである。すばらしい仲間を守られた頓所好勝であったと思う。河辺記